



緑再生、1万本植樹へ

松食い虫の被害進む加賀海岸

国定公園に指定された加賀海岸（加賀市）のクロマツが数年前から、松食い虫の被害で枯れている。江戸時代中期に大聖寺藩が植樹したという歴史を持つクロマツだが、駆除が追い付かないことから、加賀市はクロマツの代わりに、加賀海岸の植生に合った広葉樹の苗を植え、緑の再生に乗り出すことにした。

加賀市橋立町の加佐ノ岬に30日、市民ボランティアらが集まり、タブノキなど広葉樹1万本の苗を植樹する。イオン環境財団（千葉市）と林野庁石川森林管理署も協力する。

回市によると、加賀海岸は全長16・5キロの自然海岸で、宝暦年間（17

土地に合う広葉樹選ぶ



51〜63)以降、大聖寺藩が田畑を砂から守るためにクロマツを植樹、明治時代には国が約2千万本のクロマツを植えた結果、現在の加賀海岸自然休養林が広がっている。ところが、数年前から加賀海岸約5300総にあるクロマツの8割ほどが

植樹されるタブノキの苗木=加賀市で

学生が種子を集め、市が育てた苗を使う。回市は「自然と文化が息づくまち」をまちづくりの目標に掲げており、01年11月から今年3月までに、動橋町の動橋グラウンドや片野町の片野海岸など7カ所に計約1万5500本の樹木を植えている。

松食い虫の被害で枯れ始めたため、回市が、財団法人国際生態学センター（横浜市）に相談。同センターが3年がかりで実施した植生調査の結果、広葉樹を植えることが決まった。

今回植樹される1万本のうち半分は、市内の小

市民主体「本物の森づくり」

同センター所長で横浜国立大学名誉教授の宮脇昭さん(76)は「21世紀は、防災環境保全林をどのように作っていくのが課題。人間の命と文化を守るためには、本物の森作りしかない。土地に合った樹木を選び、市民が主体となった植樹を続けていくことは大変意義深い活動だ」と話している。ボランティアの希望者は回市地域支援部(0761・72・7905)へ。